

書評

「Fields Virology 第5版」

ウイルス学の信頼できる参考書として知られている Fields Virology が全面的に改訂された。

初版は1985年であり、当初からウイルス学を広く網羅した重厚なテキストであった。この本の大きな特徴は、それからほぼ5年から6年の周期で、内容がアップデートされていることである。今回は第5版（2006年12月出版）であり、前回の第4版（2001年）から約5年後の更新である。各章の参考文献には、ざっとみて2005年までのものも含まれ、中には2006年というものもある。

Fields Virology は、ハーバード医科大学のレオウイルス研究者であった Bernard N. Fields が中心となって企画したリファランスであり、第3版出版後の1995年に Fields が膀胱癌で亡くなってからも彼の名前を冠している。主としてヒトに病原性のあるウイルスを中心として、その分子生物学から個体レベルの病原性についてまでの最新の知見を、各分野の専門家が執筆している。これに加えて、バクテリオファージや原生生物・微細な藻類などのウイルスを含む広い範囲のウイルスや、プリオンまでも記されたウイルス学の百科事典になっている。この版で大幅に入れ替わった130名あまりの執筆者の中に山西弘一先生、河岡義裕先生を含む4名の日本人も含まれているのは心強い。

総論に当たる Section I: General Virology, 各論に当たる Section II: Specific Virus Families に分かれ、今回の改訂では総ページ数（約3000ページ）は増えていないなかで、総論の数が1章増え、各論は12章減って、ずいぶん整理されたという印象をもつ。研究が進んで情報量は増えているはずなのにこうなったのは、情報が選択されて重要なところがまとめられたのだろうと考える。

総論では、ウイルス複製がRNAウイルスとDNAウイルスからひとつにまとめられた一方で、新たに "Emerging virus diseases", "Viruses that infect protists"（原生生物に感染するウイルス）の新しい章が追加された。また、免疫に関する章が整理されて、自然免疫と獲得免疫という二つの章になったのは、最近の自然免疫研究の進歩に対応したものだと思われる。さらに相変わらず着実に進んでいるウイ

ルス蛋白質立体構造の章でも、新たに構造が明らかになった一群の蛋白質の記述が追加されている。各論では、"mononegavirales"（mononegavirus を俯瞰した短いまとめ）と "henipaviruses" の章が新たに追加された。また、多くのウイルスで、ウイルス複製とウイルスの病気の章に分かれていて内容が重複していたものが統合された。リダグンシーが減って、すっきり整理された印象である。

体裁としては二色刷になって青色が見出しに使われて見やすくなった。また、前の版と同様に図を網羅したCDが供給されている。必ずしも解像度は高くないが、講義のスライドに借用するには十分である。ただ、図の取り出し方がブラウザを経由する方式なので、少々面倒なところがある。

分担執筆なのでばらつきがあるかもしれないが、この本に書かれていることは現在のウイルス学の主流の考え方であると言ってよいと思う。この本の "章" が論文のイントロダクションで時折引用されているのを目にする。興味があるところを読むと、今はこうなっているのかということがわかる。その中で、まれに自分たちの論文が引用されていればウイルス学に貢献できたかということで幸福な気分になる。一方で、読んでみて意外に思うところがあれば、それは更に調べる余地があることで、次の論文の種になり得ると思う。少なくとも自分の分野のところは一読に値する。

また、本書はウイルスの講義をするときの有用な参考書であり、ウイルスについて調べ物をするのに最適である。何か確認するときに備えて座右に置いておきたいと思う。ウイルスおよびウイルス病に興味を持つすべての領域の研究者・医師などにぜひお勧めしたい。

坂口剛正

広島大学大学院医歯薬学総合研究科ウイルス学研究室

〒734-8551 広島市南区霞1-2-3

Tel: 082-257-5157

Fax: 082-257-5159